

studio works

スタジオコース作品から

Selected Students' Works from Studio Course 2012

学部の4年生は毎年「スタジオコース」と呼ばれる設計演習課題に取り組むことになる。

それぞれの担当教官が独自のテーマを設定し、学生はそのテーマに応じて、自らの望むコースを所属する研究室に関係なく自由に選択するといった、いわば卒業設計の前哨戦だ。その様々な作品の中から、2012年度は4コース7名の作品をここに紹介する。

In the 4th grade, undergraduate students take the design class called 'studio course'.

Each professor sets up his original subject, and students select freely regardless of their laboratory.

These studios, so called, are 'the preliminary skirmish' of diploma projects.

We will introduce 7 works of this year among the various courses.

竹山研究室 / TAKEYAMA Studio

“世界を望む家”

Taebum KIM
Keigo NISHIO
Kaori TAKANO

世界の屋根、ヒマラヤを望む丘の上にホテルを設計する。限られた技術と材料と輸送手段によっていかに豊かな空間を獲得できるだろうか。

高松研究室 / TAKAMATSU Studio

“生きるための建築”

Taro AWANO
Iku WATANABE

生 き る た め の 建 築 を 構 想 し て 。

岸研究室 / KISHI Studio

“歴史と接続する建築”

Ryoko KISHIMOTO

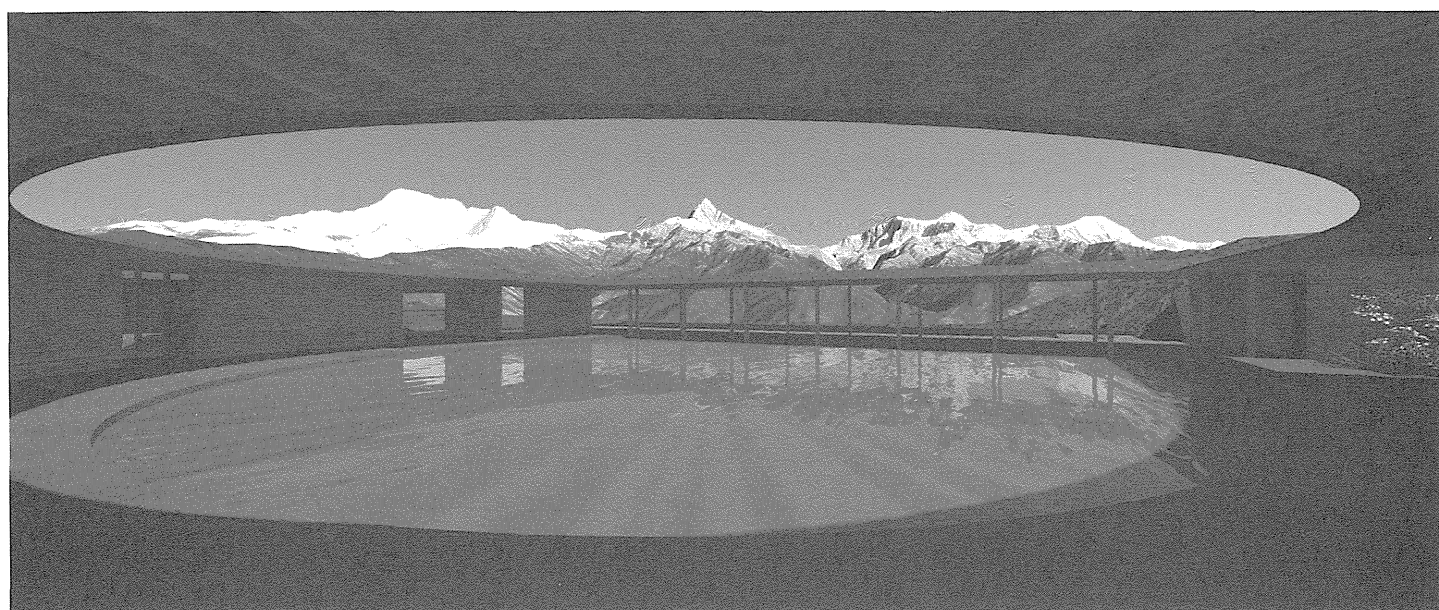
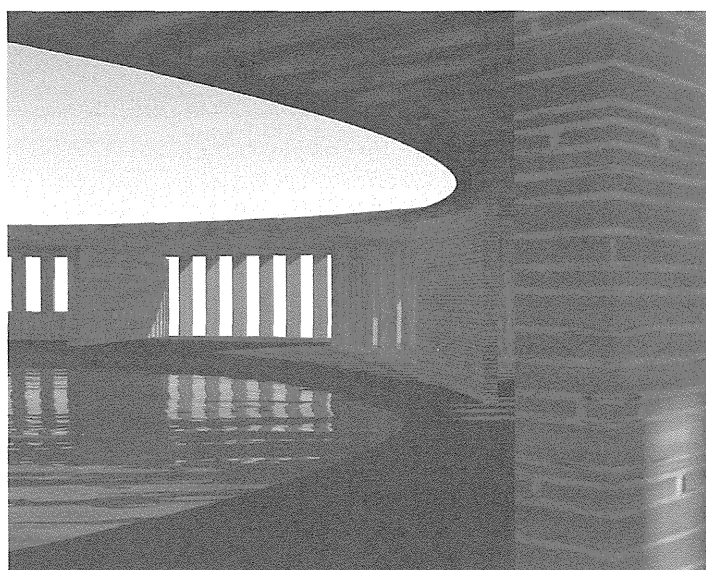
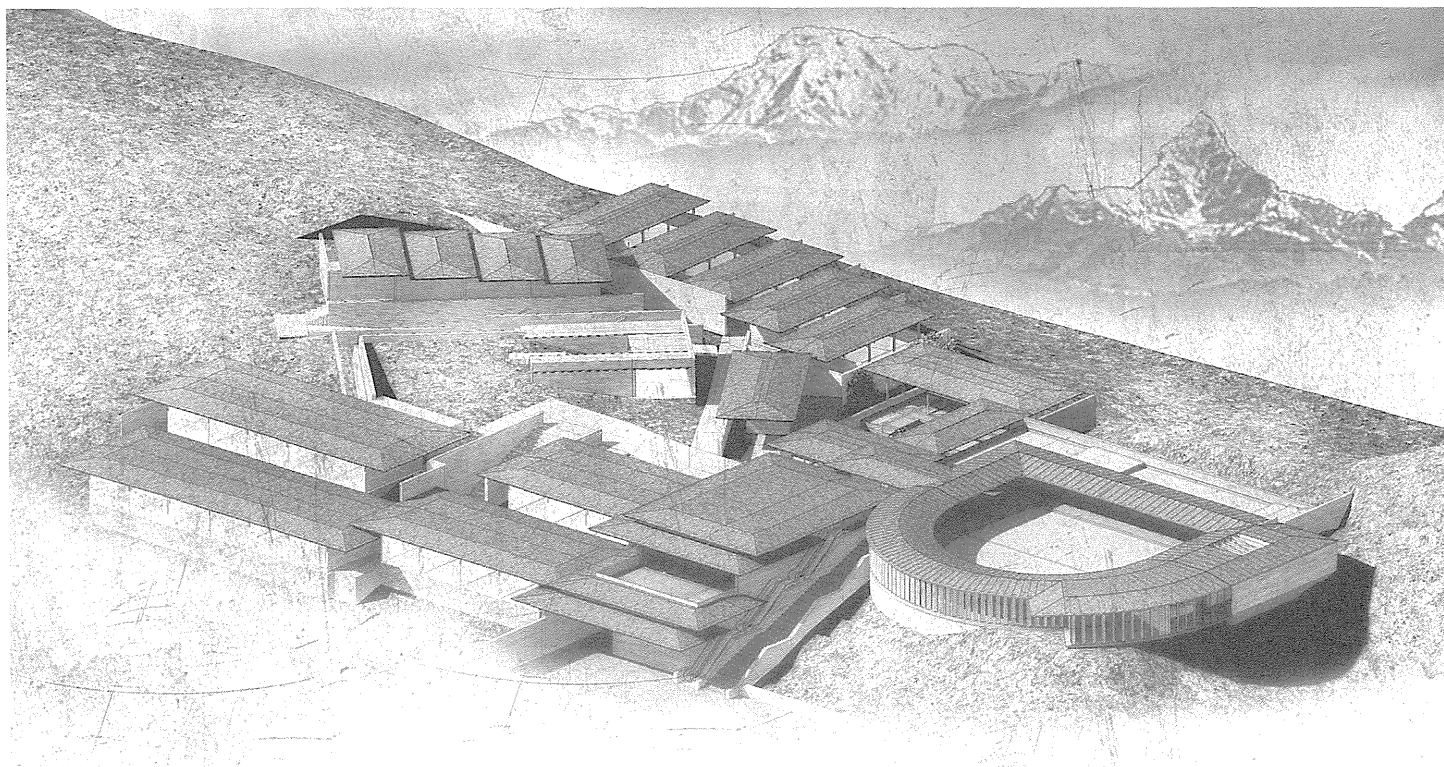
建築と都市には、それぞれに光と闇を内包した歴史がある。われわれがこれから新たに構築する建築物は、そうした歴史にどのように対峙し、継承してゆくことができるだろうか。本課題では時代の奔流を生き抜こうとしている都市ミュンヘンの文化的地区の美術館計画の課題を通して、このことを問うてみたい。

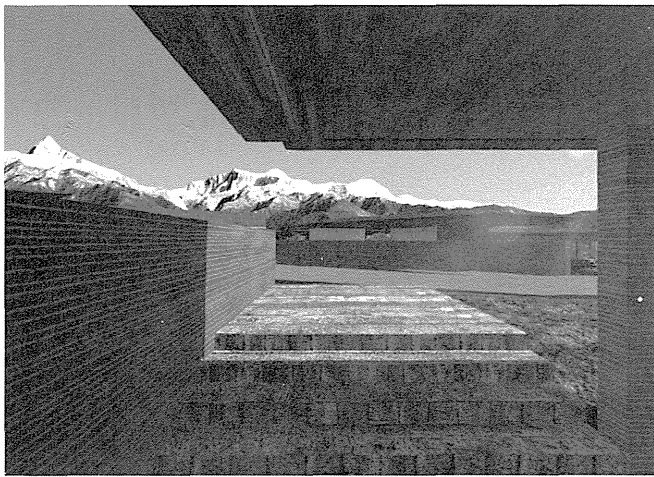
門内研究室 / MON-NAI Studio

“都市と建築”

Keishi YAMAZAKI

21世紀を迎えて、大量生産・大量消費を基調としたデザインが行き詰まり、環境や社会の制約条件などを考慮して、幅広い要求を質的に満足するデザインへの転換が求められている。そこでは、デザインを「人間と環境との関係に変化をもたらす」営みとして理解し、個々の人工物のデザインにとどまらず、人工物相互の関係や人工物と環境・人間との関係に配慮することにより、豊かな環境・社会システムをデザインすることが求められている。都市の中の建築は、他の人工物や人間・環境とのネットワークを形成する結節点として存在する。このスタジオでは、「都市と建築」のダイナミックな関係に焦点を結び、京都という都市をフィールドとして、ミクロな建築レベルの環境のデザインを通して、マクロな都市レベルの環境をデザインする可能性を探索する。具体的には、歴史都市・京都の都市空間に「魅力的な場所と風景を創発する新しいタイプの建築（の集合）」を提案する。

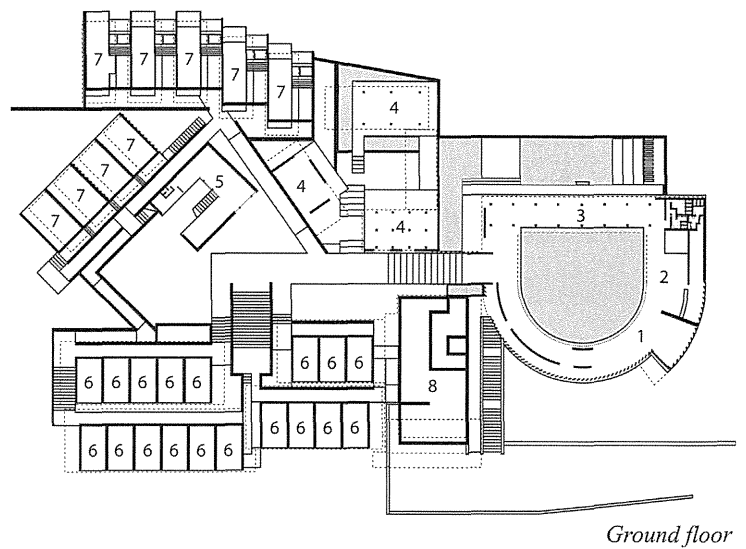




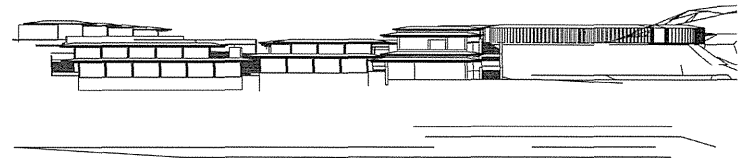
敷地のサランコット丘の上には平地が東から西へとゆっくり続き、北西に伸びる綺麗な尾根筋の根元と触れ合っている。南斜面からはポカラ盆地と遠くのフェア湖の風景が楽しめる。敷地の真北にはマチャプチャレの峰が現れ、まるで屏風のように敷地を囲んだアンナプルナの連山が視野全体に広がる。

この計画では「地形」と「風景」という二つの条件を読み取り、建築的要素と共に全体を構成している。各要素はダイナミックに変化する地形に溶け込み、人間の手で加えた屋根の連なりは新しい景観を生み出す。さらに地形と建築により切り取られた風景はめりはりを持ったシーケンスを構成する。壁と屋根、地形と道による単純な構成のこの建築は、それを囲む崇高な自然と、建築が建つ地形に頼りはじめて完結される。

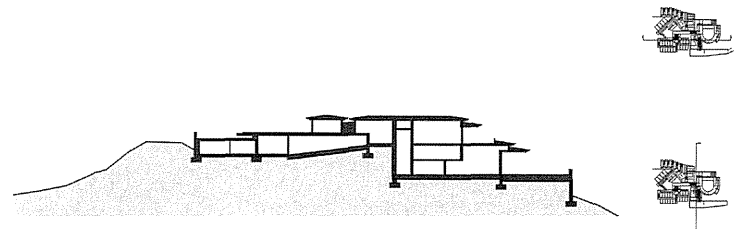
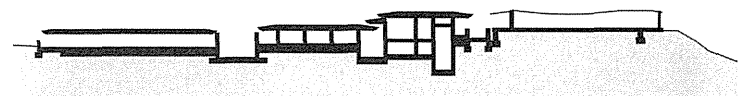
- 1 Lobby
- 2 Reception
- 3 Sunrise Terrace
- 4 Restaurant
- 5 Library
- 6 Standard Room
- 7 Suite Room
- 8 Office



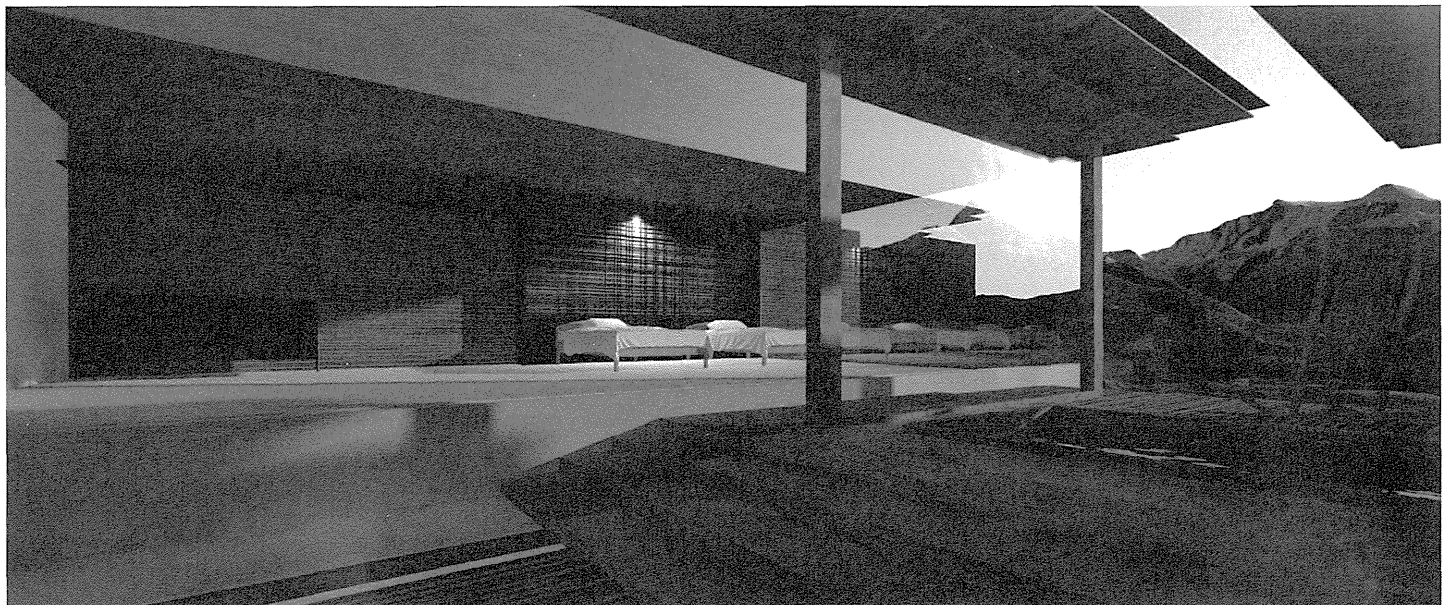
Ground floor

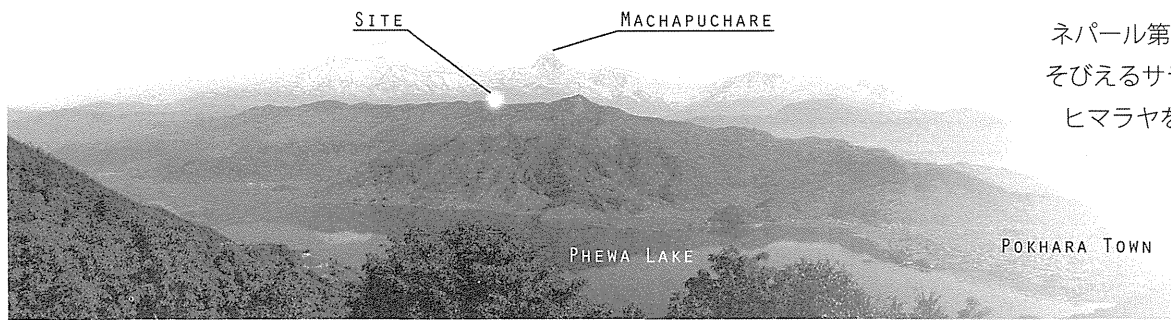


South-east elevation



Sections s=1:1500





ネパール第2の都市ポカラの傍に
そびえるサランコットの丘の上に、
ヒマラヤを一望できるホテルを
計画する。

PERIODOT

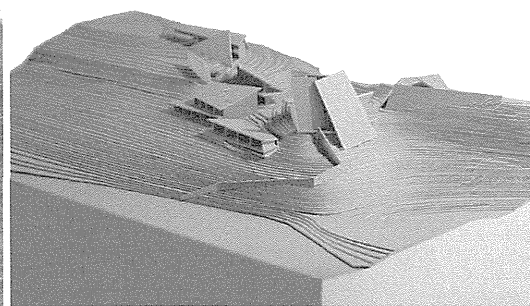
建築は常にその土地が原初から持ち続けている
様々な性質と関係を持つ。

大地の流れや地層、
風、空気、太陽光、風景。

建築が行われた歴史が少ない土地で建物を
計画することは、建築という人間の営みを通
じて、その土地のそうした性質を
はじめて認識することではないだろうか。

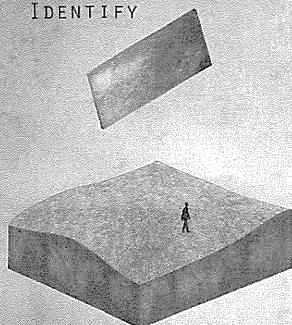
そしてここで建てられたものは、それまで
大地の原形が残されていたように建築も
また残り続けていくのではないか。

壮大なる大地に点描を刻むように、
確かな人間の営為として、一つの痕跡を
残すような、「残る建築」を構想する。



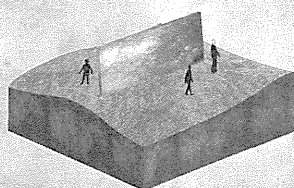
Concept Diagram

IDENTIFY



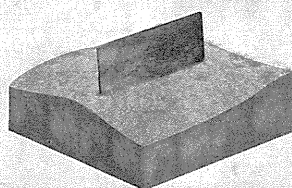
建築の面によって、
大地の面を相対化し、認識する。

FUNCTION



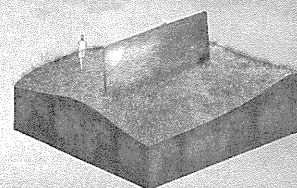
ホテルとして機能する。
多くの人を惹きつける。

ABANDONED

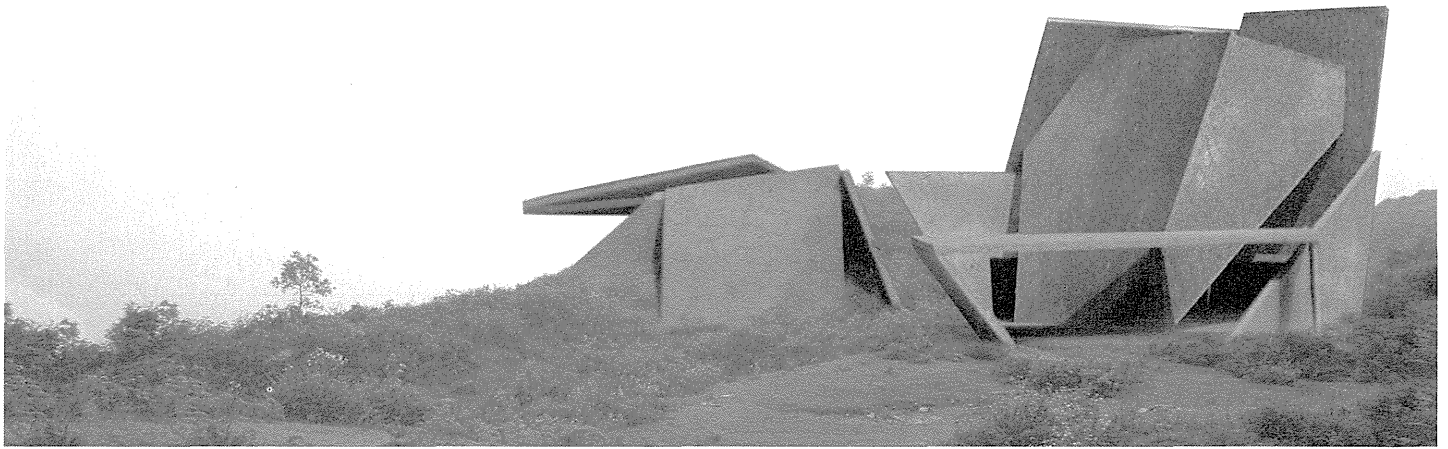


時代とともに役割を終え、
廃墟となる。

REMAIN



大地を認識した行為 = 建築のみが
残り続ける。



1. 尾根筋からエントランスタワーとレストランを望む。



2. エントランスタワー内部のロビーから客室とマチャブチャレを望む。

- 1 Entrance Tower
- 2 Restaurant
- 3 Standard Rooms
- 4 Delux Rooms
- 5 Sweet Rooms
- 6 Small Library & Museum

Plan 1:2000

20 40m

PHEWA LAKE

MACHAPUCHARU

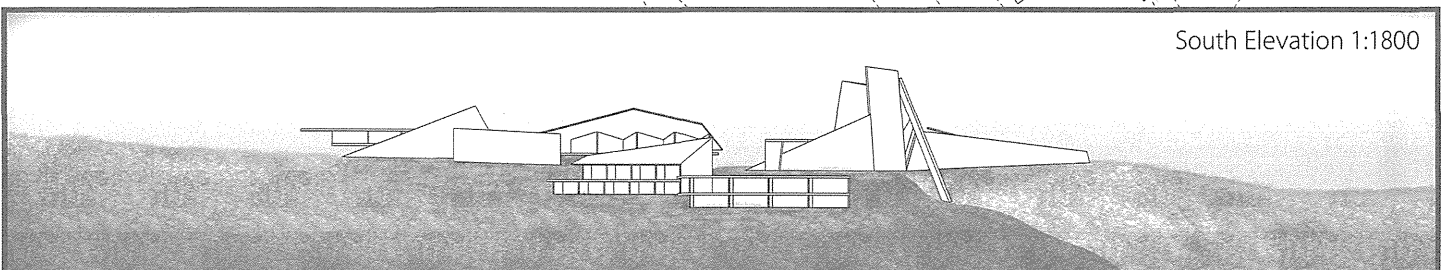
N



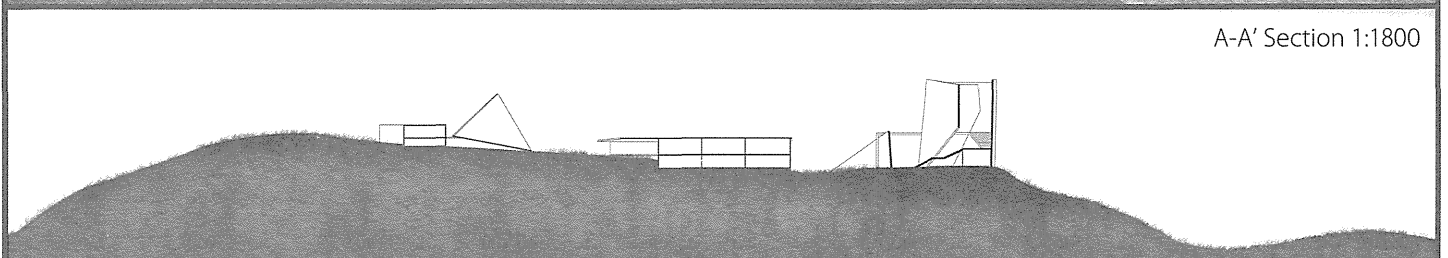
ROPEWAY

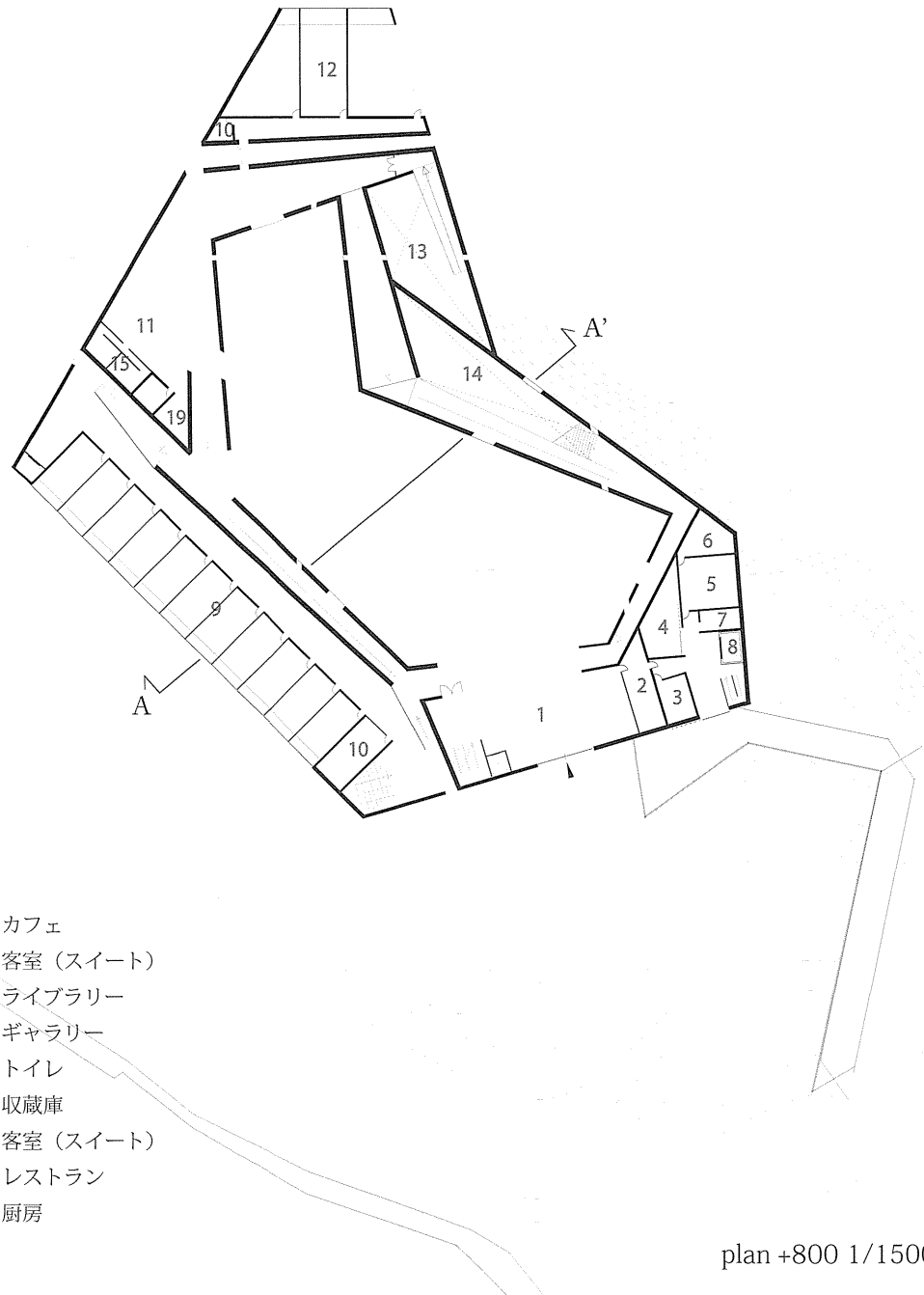
POKHARA TOWN

South Elevation 1:1800



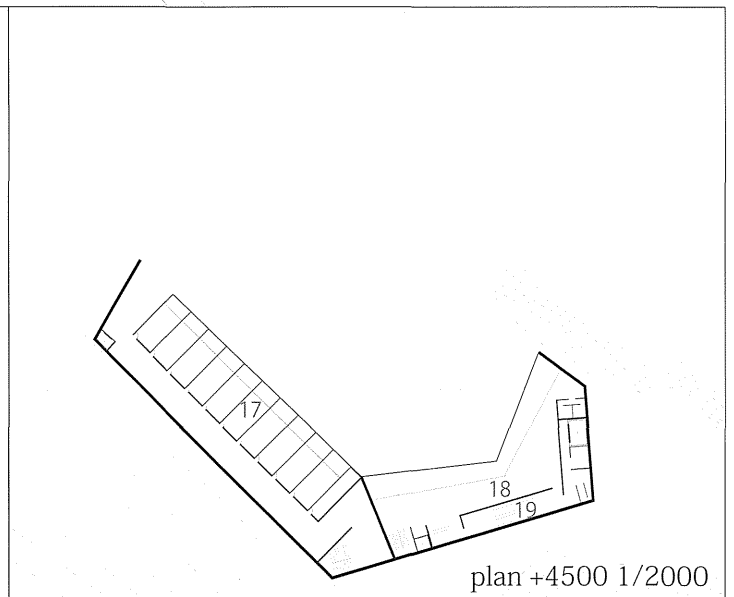
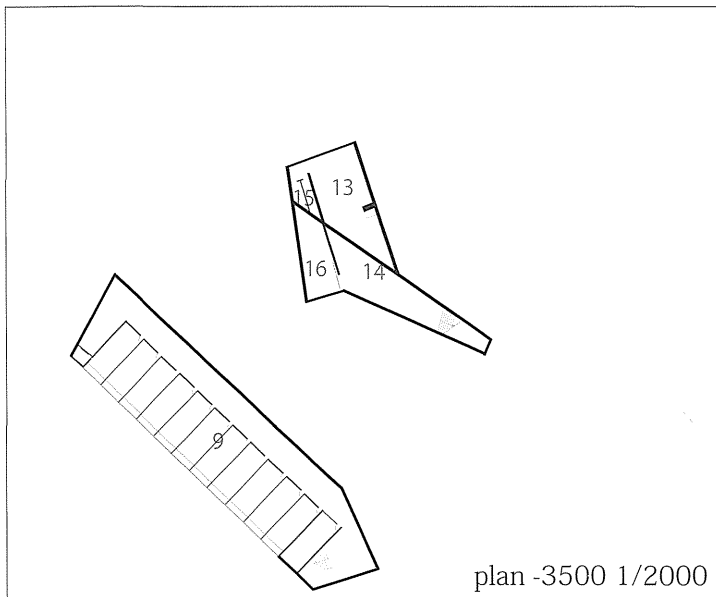
A-A' Section 1:1800





function

- | | |
|--------------|-------------|
| 1 エントランス・ロビー | 11 カフェ |
| 2 事務室 | 12 客室（スイート） |
| 3 従業員室 | 13 ライブラリー |
| 4 倉庫 | 14 ギャラリー |
| 5 機械室 | 15 トイレ |
| 6 電気室 | 16 収蔵庫 |
| 7 食料倉庫 | 17 客室（スイート） |
| 8 搬入エレベーター | 18 レストラン |
| 9 客室（スタンダード） | 19 厨房 |
| 10 リネン室 | |



女神の懐

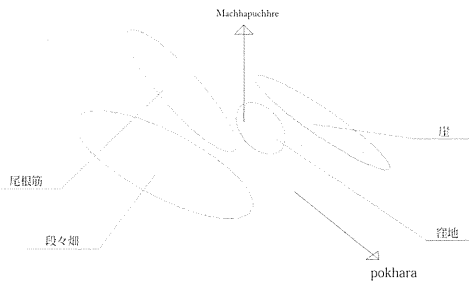
サランコットの丘の上で
空を仰ぎ
風に寄り添い
山を望む

program

ネパールのポカラという町にあるサランコットの丘の上に
ホテルを計画する

site

サランコットの丘は標高 1500m 程のところにあり
真北の方角におよそ 7000m の霊峰マチャプチャレ
アンナプルナを見ることができる



concept

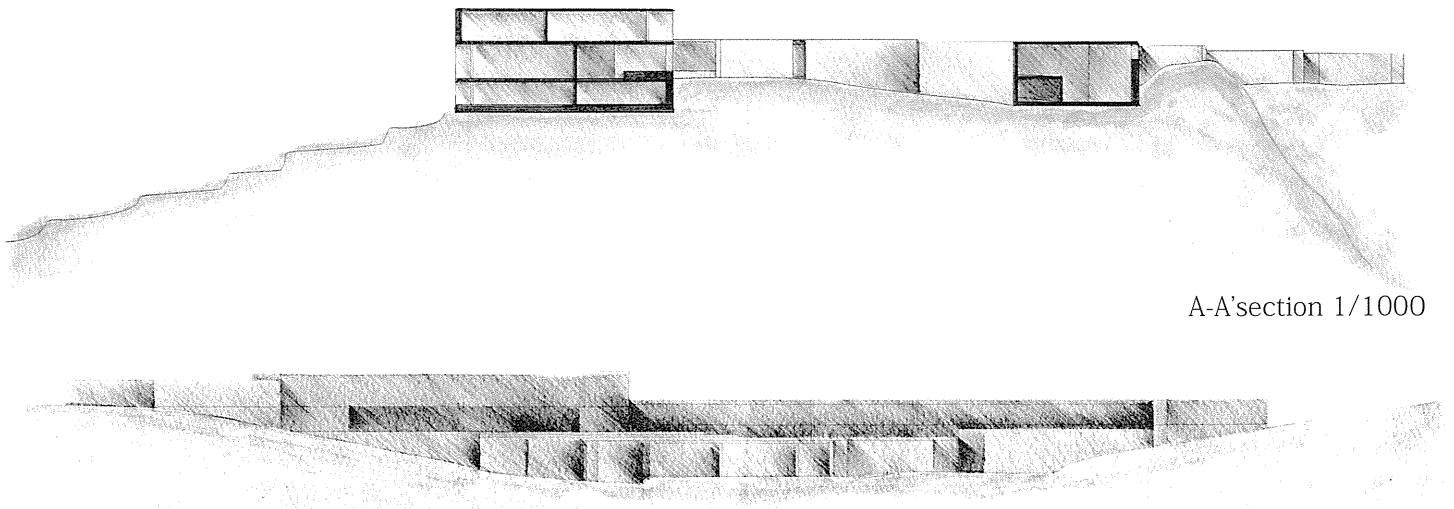
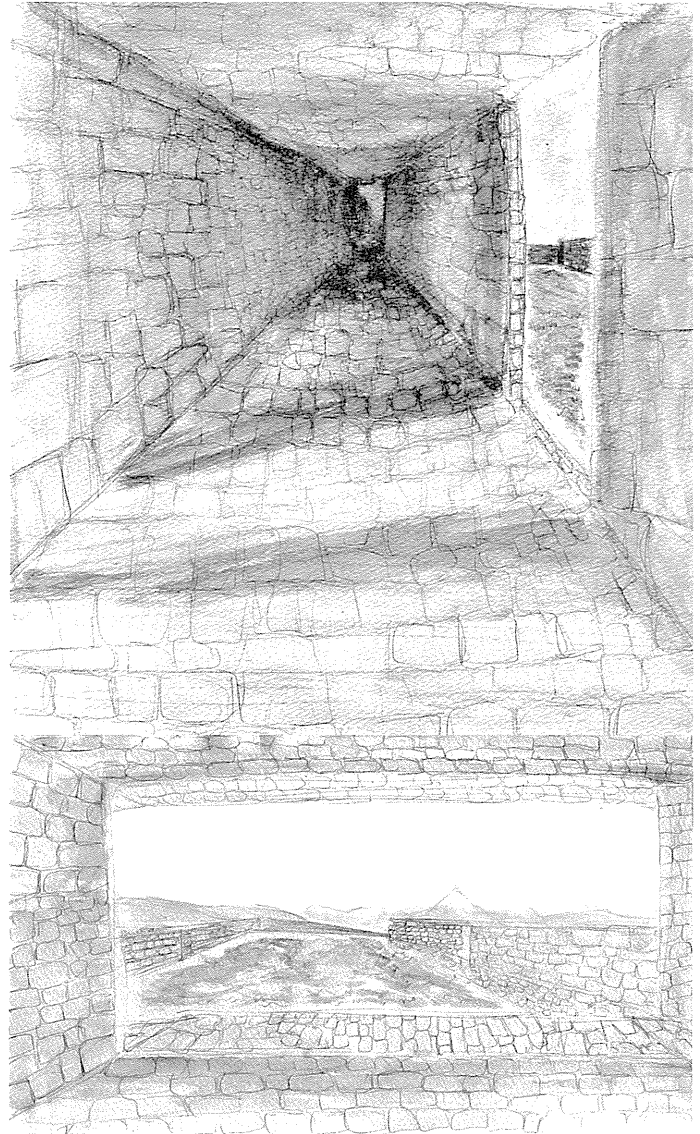
自然の生み出したものに敬意を表し
地形の起伏に合わせた操作によって建築を計画する

diagram

回廊と中庭

起伏ある地形に合わせてボリュームをおき
それを回廊でゆるやかに繋ぐ

回廊を歩いていると
面した中庭がところどころ顔を見せる
中庭という不思議な空間が回廊に変化をもたらす



A-A' section 1/1000

north elevation 1/1000

simulacrum

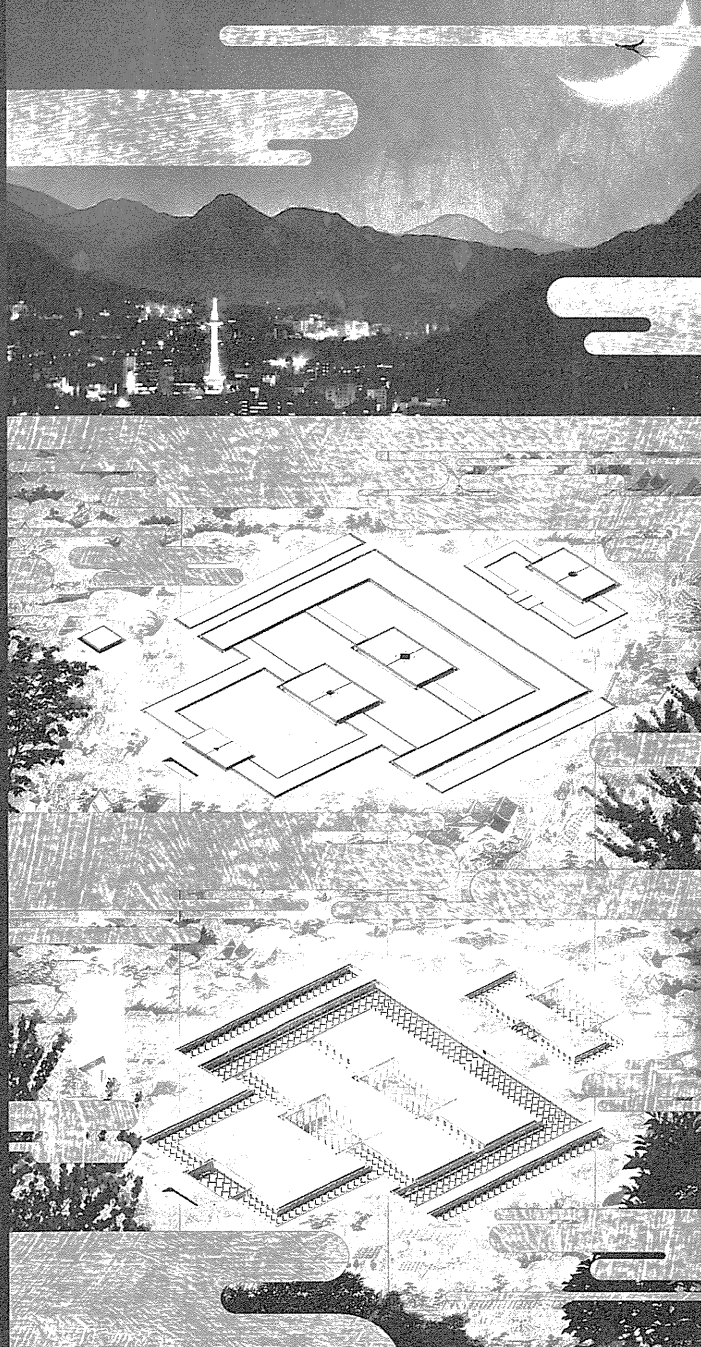
-京都・西寺の復元-

現実と虚像

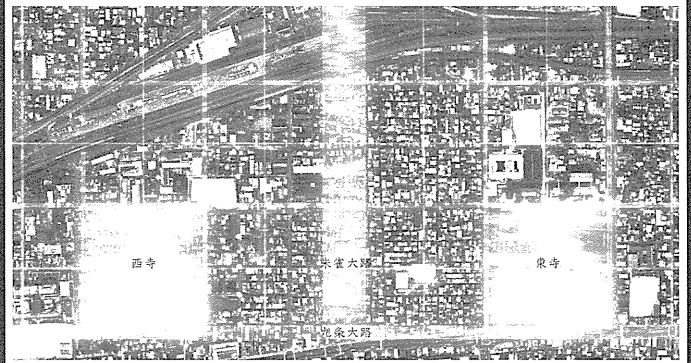
二つが重なり合ったとき
千年の時間の奥に揺らぐ幻影が
私たちに語りかける

虚像による現実の補完

そこから生まれる見せかけの幻影
ある建築の、儚い幻影を辿るための建築である



敷地

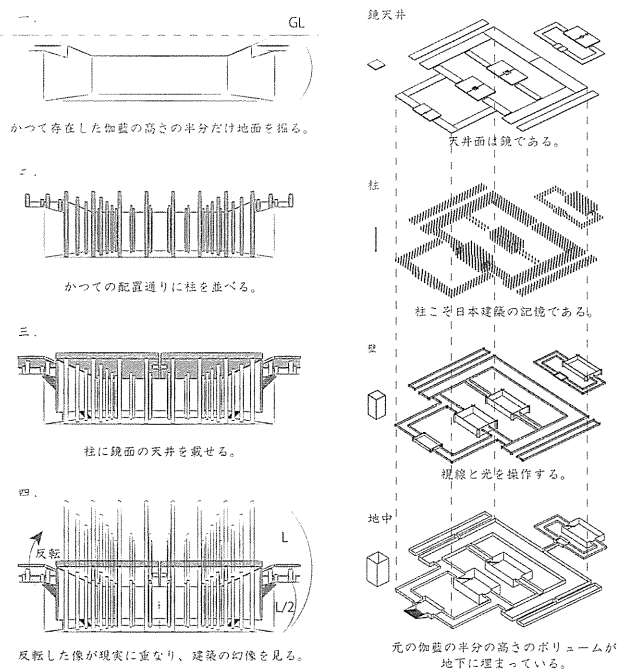


凡そ千二百年前、平安京に都が移されたとき、
ただ二つだけ寺院の建設が認められた。東寺と西寺である。
朱雀大路を中心として反転した伽藍配置を持った二つの寺院は
全く逆の運命を辿る事となる。
かつての平安京の条里制は少しずつ崩れ、
京都の中心も左京へと移ってしまった一方で、
東寺の領域は今もほぼ変わらず残っている。
右京の衰退に伴い荒廃していった西寺は再建されることがなく、
歴史からその姿を消していった。
現在は西寺跡公園に講堂の礎石が残されているのみである。

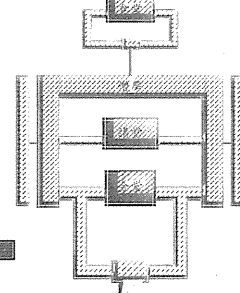
この敷地において、復元という行為に新しい在り方を提案する。



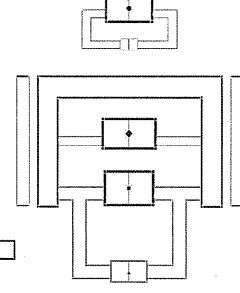
断面 / 構成



地下平面図



屋根伏図

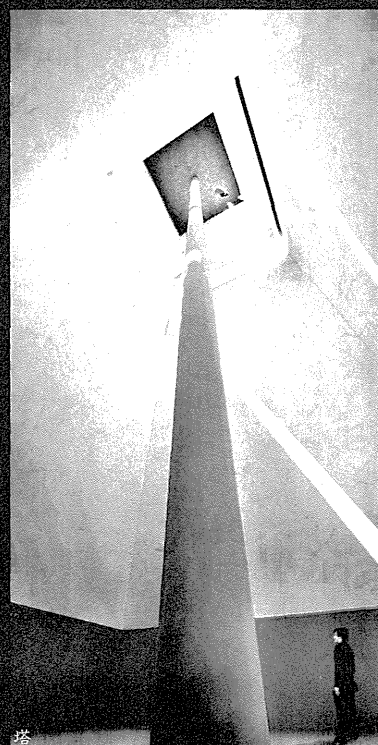




金堂



回廊



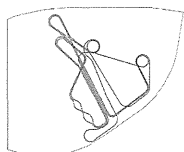
塔



南北断面図

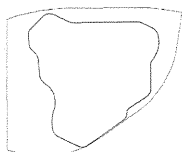
DÉJÀ VU 60' -EXPOLAND FOR THE FUTURE-

◇Layer I



layer I: Promenade for déjà vu 60'
(= かつてのジェットコースター)
新たなユートピア/ディストピアへの遊歩道

◇Layer II



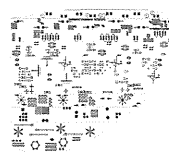
layer II: Wall
(= かつてのモノレール)
緩やかに開く境界としての城壁

◇Layer III



layer III: Lake
(= かつての遊歩道)
領域を分断し囲みこむ水鏡

◇Layer VII



◇レイヤーシステム◇

エキスポランドに造られた多くの記憶のレイヤーを読み換え、再構築する。再構築した記憶のレイヤーに、さらにクロノロジカルに配置された建築を重層させ、関係性をもたせながら統合させてゆく。

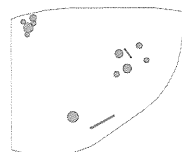
layer VII: Chronological Stripes
(= 年代順に配置される建築群)
記憶と接続する建築

◇Layer IV



Layer IV: Green
(= 既存の樹木)
かつての記憶を想起させる樹木群

◇Layer V



layer V: Plaza
(= かつての遊具)
無為の時間を過ごす広場

◇Layer VI



layer VI: Memorial Void
(= かつての建物)
道情のヴォリューム分の地下ヴォイド

layer 1964



land: Stone

layer 1965



land: Concrete

layer 1966



land: Plane

layer 1967



land: Grass

layer 1968



land: Sand

layer 1969



land: Stone

layer 1970



land: Concrete

layer 1971



land: Grass

layer 1972

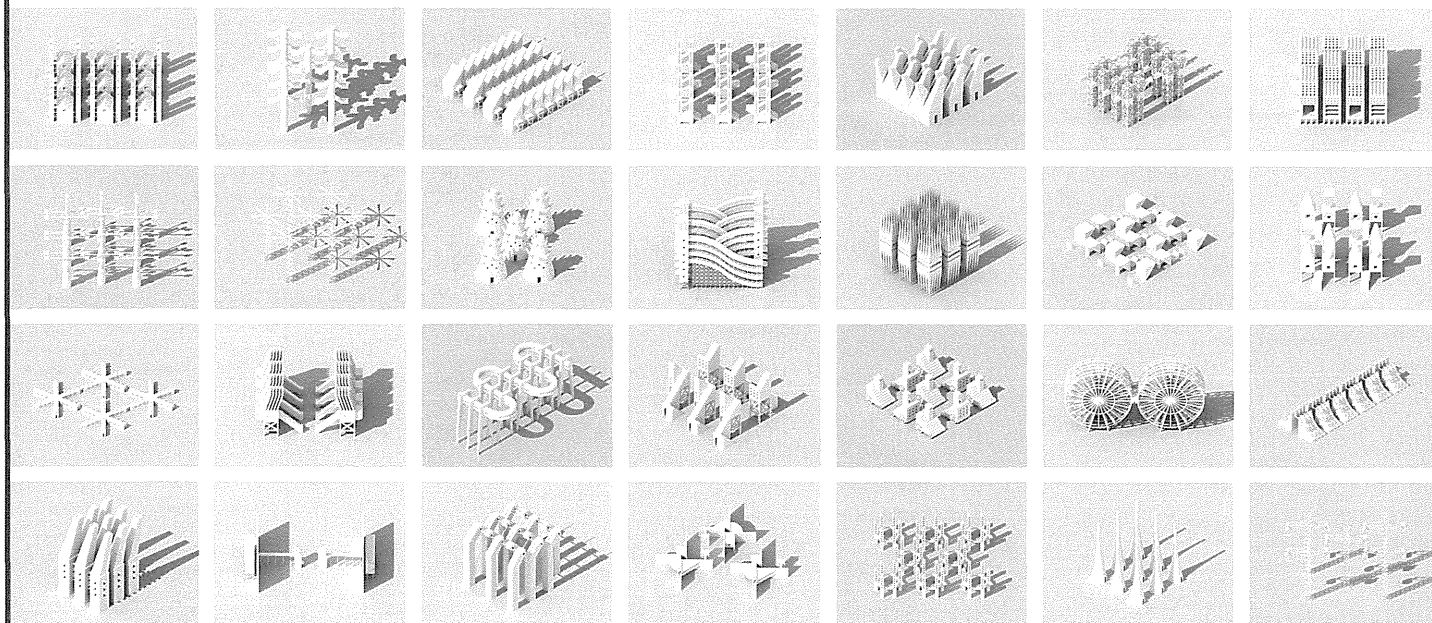
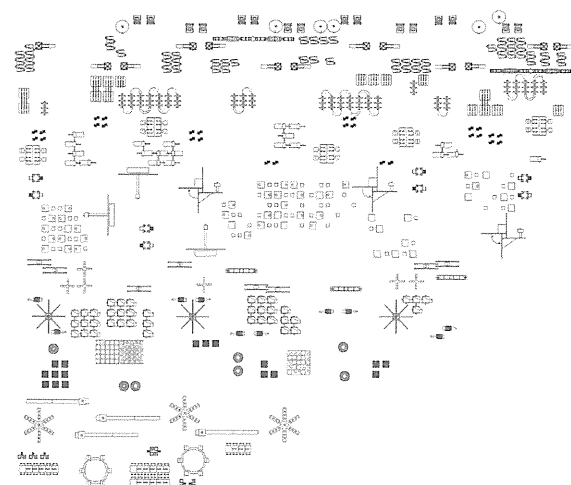
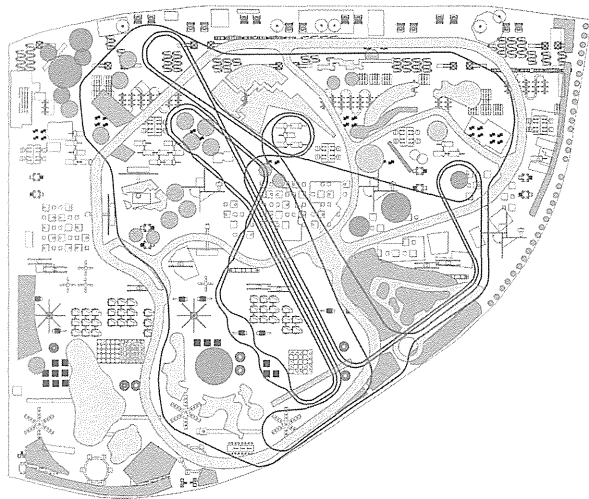


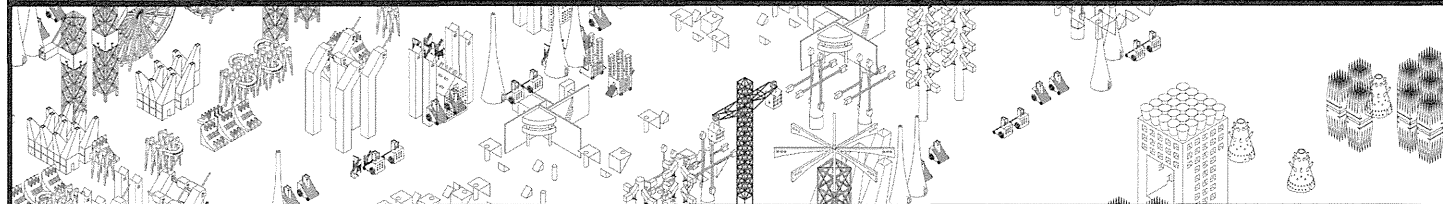
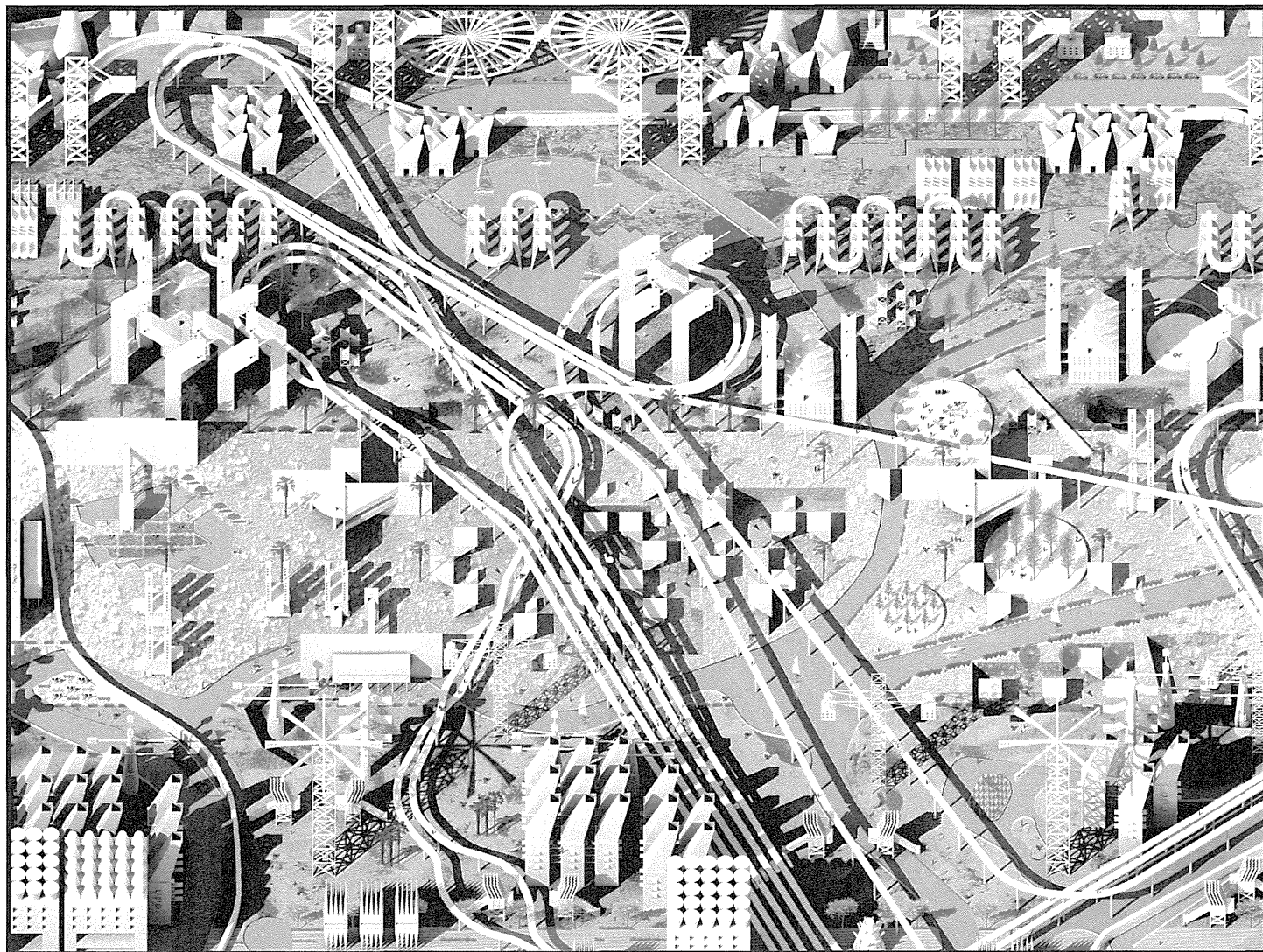
land: Stone

layer 1973



land: Wood





◇建築と記憶◇

時代特有のムードは、どのように形成され、残されていくのだろうか。
あるいはその熱狂を、その理念を、時代を越えて共有できないだろうか。

ここでは過去のテキストをもとに特定の時代についての記憶の断片を集積し、
「エキスポランド跡地計画」を通して、その時代の記憶に接続しうる建築を考えた。

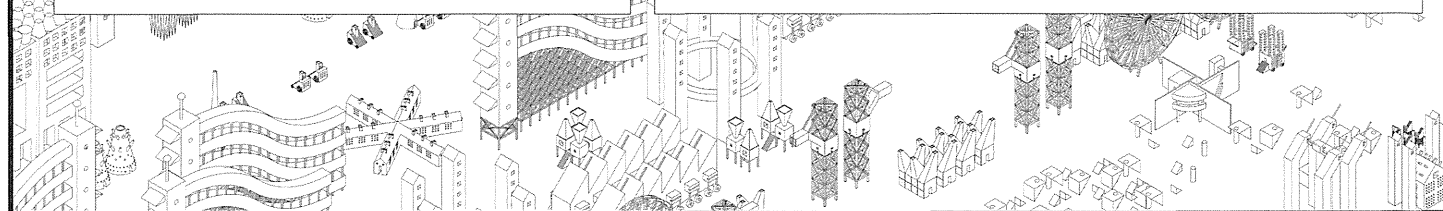
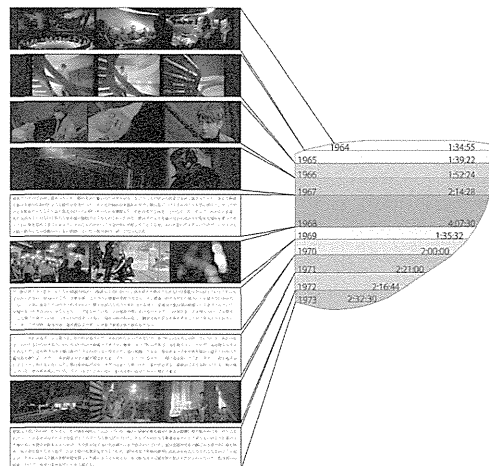
◇生成プロセス◇

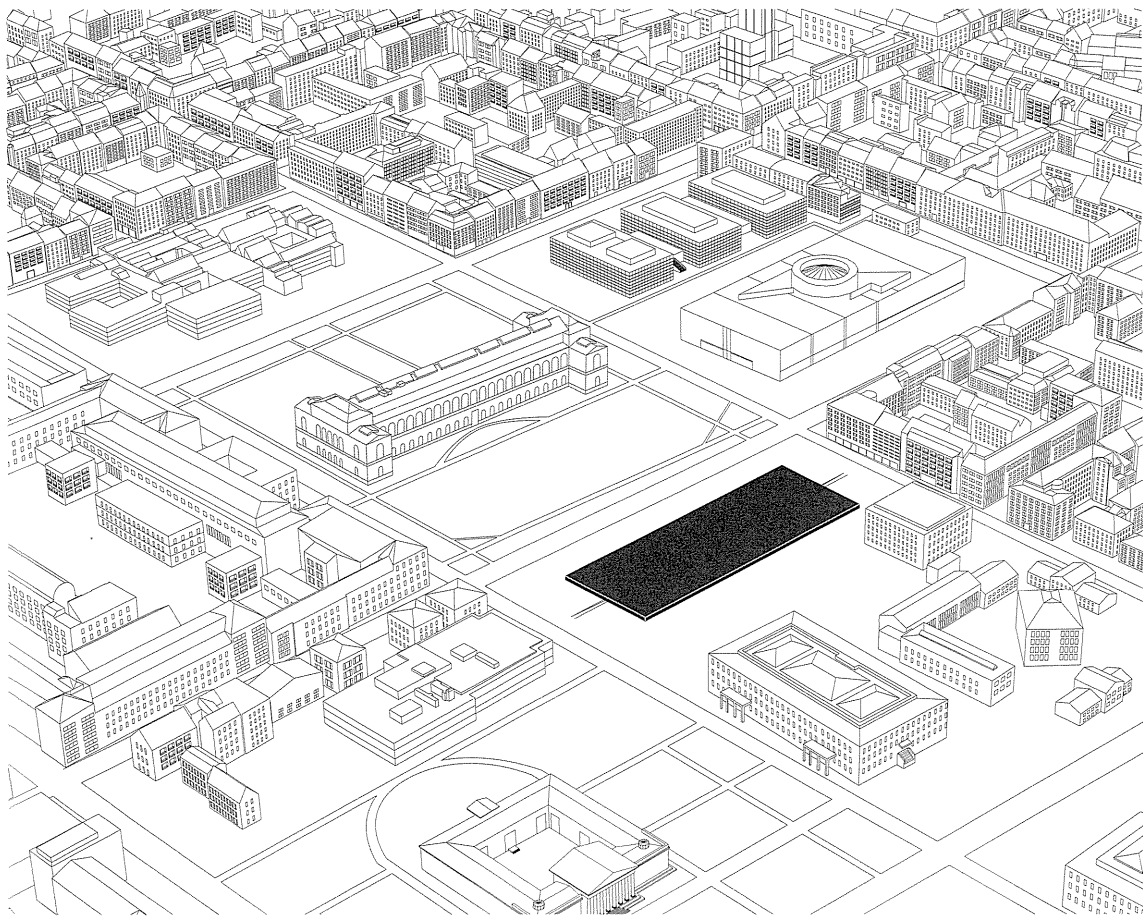
- I 設定した年代、すなわち「1960年代後半」につくられた(または舞台にした)
映像作品・文学作品を取り上げる
- II 複数の形態キャプチャを設定し、取り上げた作品のテキスト・映像から抽出した言葉をもとに
それらを形態化し、その組み合わせ・操作から「形の原型」をつくる
- III 生成した原型のスケール・反復ルールを決め、エキスポランド跡地の遺構のレイヤーと
重なりさせながら配置・統合してゆく

作品	言葉	形 (Form)	建築 (Architecture)
A	A'	F _A	A _A
⋮	⋮	⋮	⋮
Z	Z'	F _Z	A _Z
	シーン 科白・描写	形態 原型	統合 関係

◇取り上げた作品◇

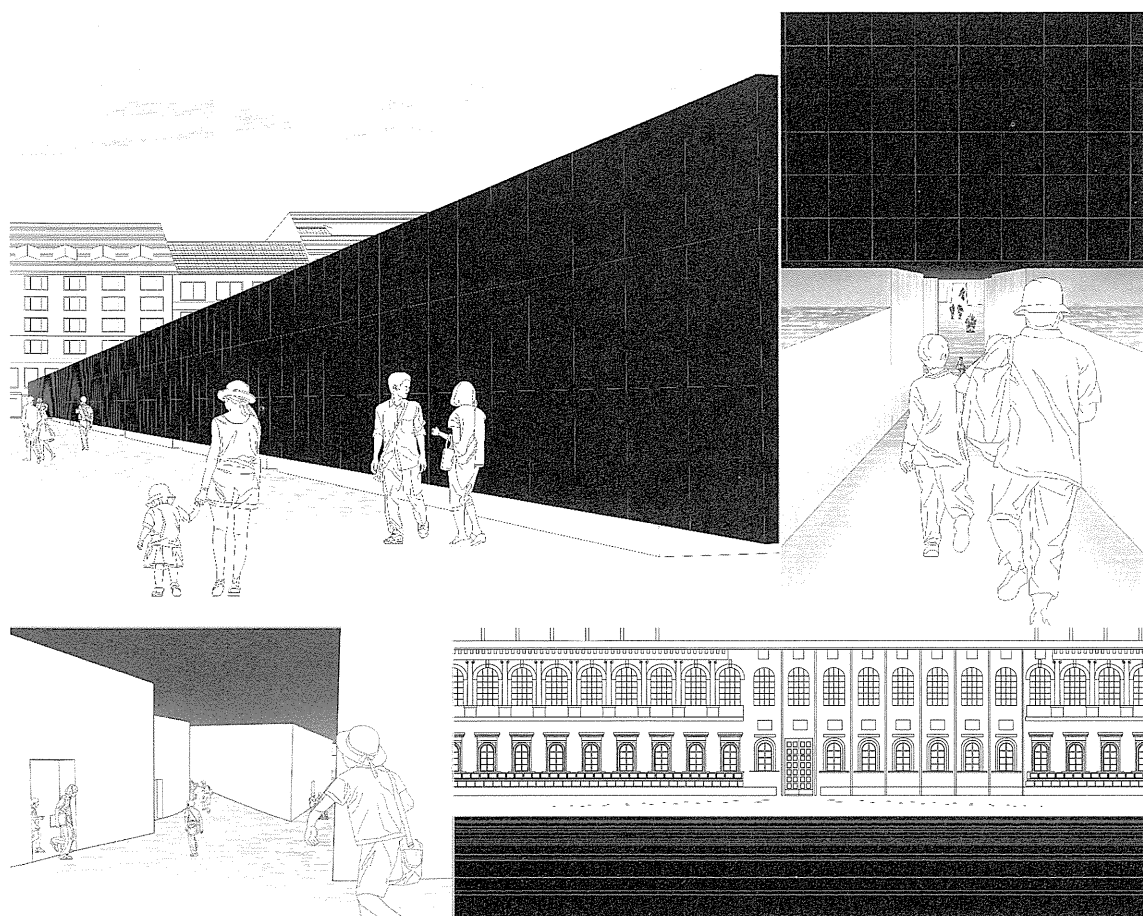
- 1964 博士の異常な愛情
または私に時間配することを止めて
永遠を奪うようになったか
- 1965 アルファヴィル
- 1966 華氏 451
- 1967 冷血
- 1968 ノルウェイの森
- 1969 イージー・ライダー
- 1970 風の歌を聴け
- 1971 限りなく透明に近いブルー
- 1972 時計じかけのオレンジ
- 1973 1973年のピンボール





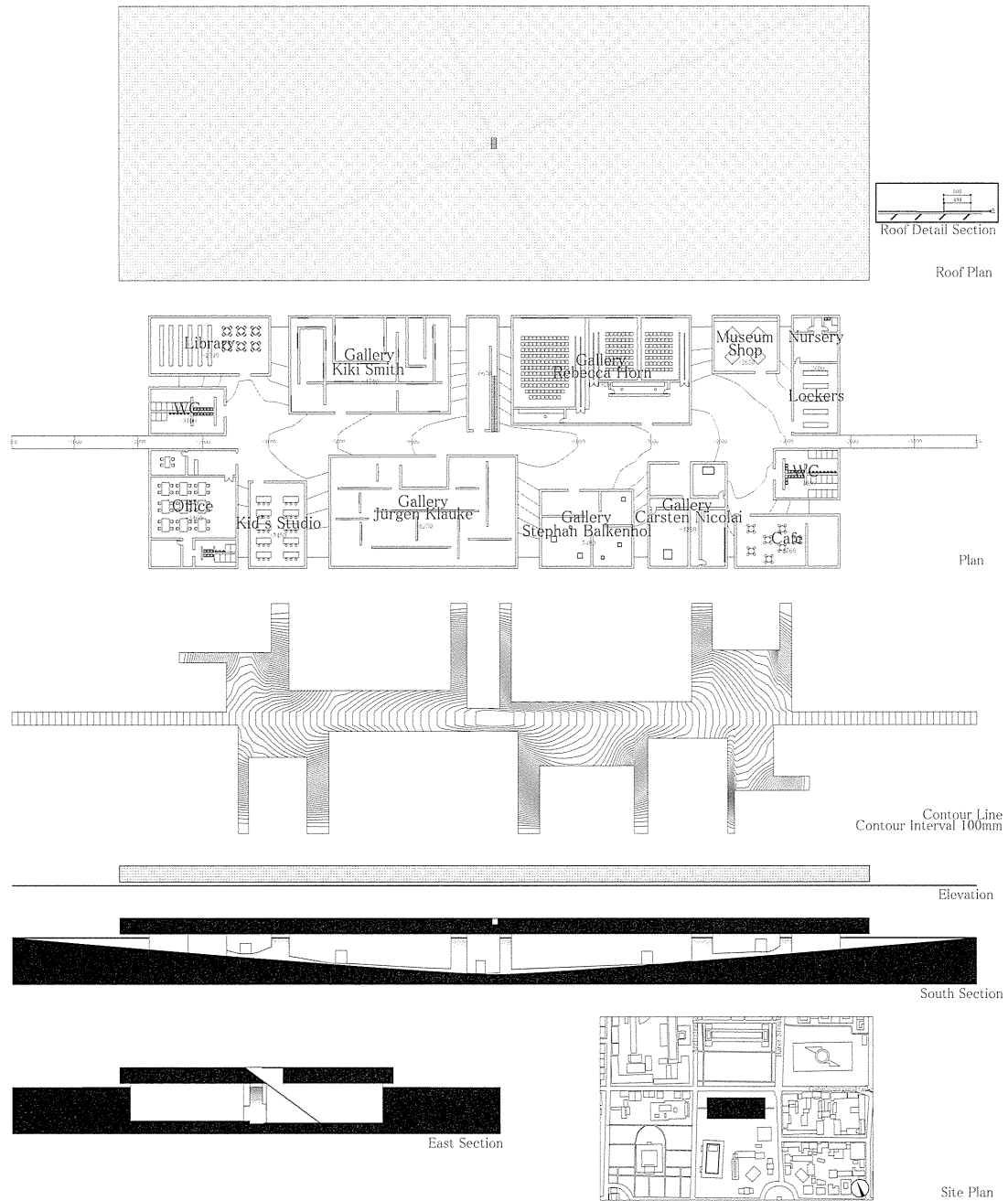
Architektur

基壇の上に建築はありました。基壇の上は秩序ある世界の象徴でした。では、基壇より下は無秩序な世界なのでしょうか。基壇より下に現代美術館をつくります。



Composition

向かいに建つ美術館アルテヒナコテークの基壇と同じ高さまで浮いた基壇と、室、地面で構成されます。基壇は、街ではなく、太陽の軸線に沿って僅かな高低差があり、基壇の上に軸が出現させます。



Artist

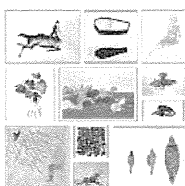
展示は常設のみ、ドイツに生まれた5人の美術館です。



Kiki Smith

Born in 1954, Nuremberg

Drawing



Jürgen Klauke

Born in 1943, Rheinland-Pfalz

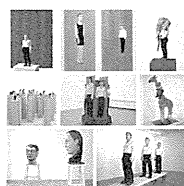
Photograph



Stephan Balkenhol

Born in 1957, Kassel

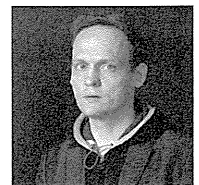
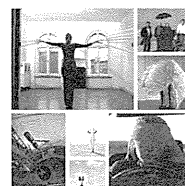
Sculpture



Rebecca Horn

Born in 1944, Darmstadt

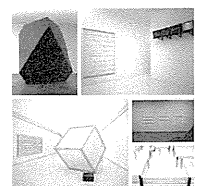
Movie



Carsten Nicolai

Born in 1965, Chemnitz

Sound Art



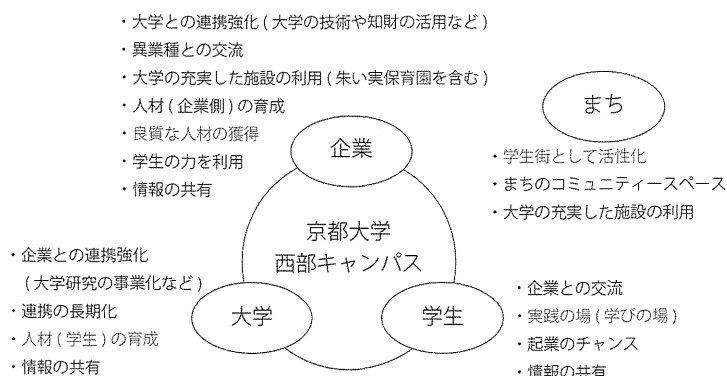


Techno Science Village

インターネットの普及等により、社会における諸問題が複雑化し、企業の研究機関だけでは解決を導くことが極めて困難になった。

大学は様々な企業と連携することによって知の集約をおこない、大学と企業が手を取り合うことでそれぞれの知識やノウハウを統合する。そうにして知の拠点（ハブ）としての地位を確固たるものとした大学は、その知財やノウハウを産学連携を通して社会に還元する。大学の知財をトランスディシプリナリに還元することで、国際競争力を持った企業を育てるシステムが生まれる。

大学と企業の知を集結させる



京都大学西部キャンパス内に産学連携の拠点となるワークプレイスをつくる。

ここでは企業と大学、学生の知識や技術、ノウハウが集結する。

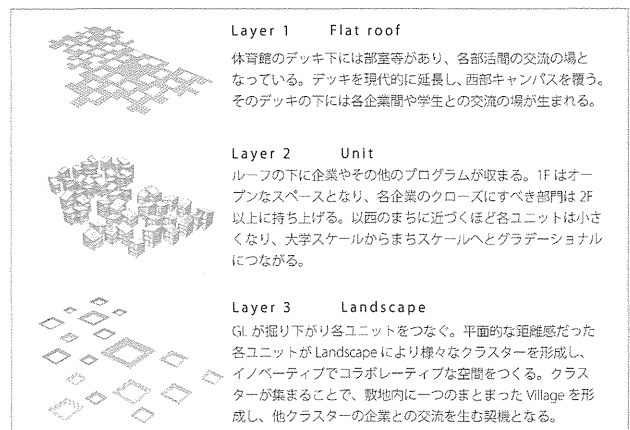
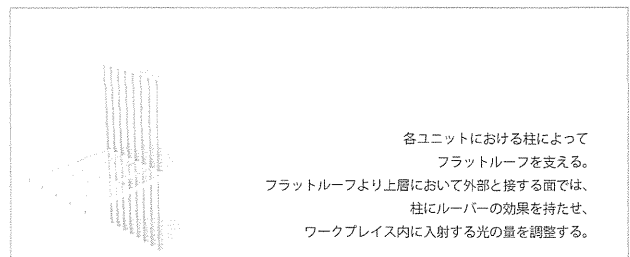
従来の産学連携を支援するベンチャープラザでは、そこに学生の介入はない。

それゆえ、大学と企業の連携ではあるものの、学生からかけ離れたものとなっている。

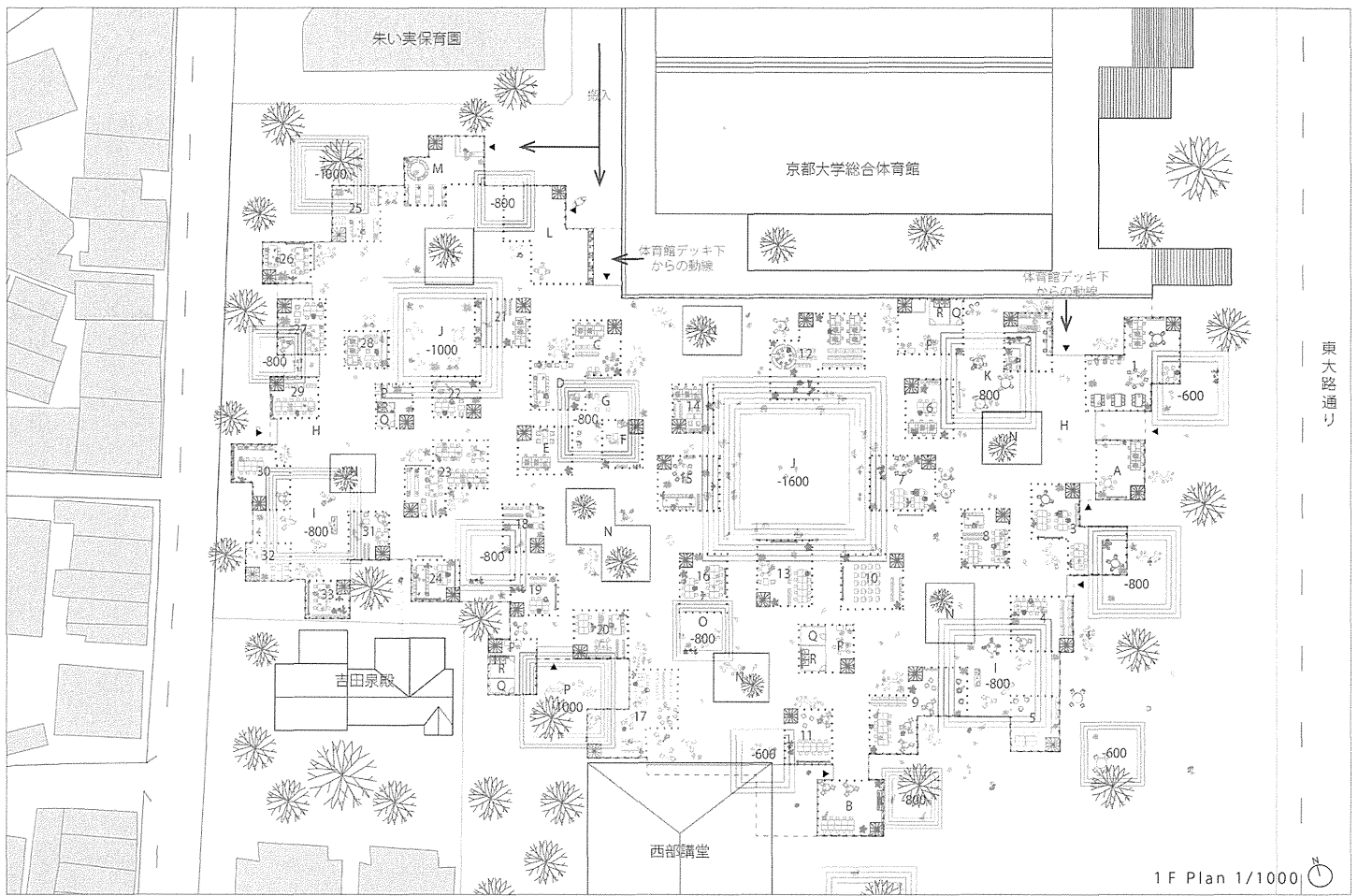
産学連携に学生が介入することで、活気あふれる交流の場が生まれ、学生をも含めた長期的な産学の交流が実現する。

近年では専門領域間の障壁を取り払ったトランスディシプリナリな連携が求められてきている。

大学と企業、学生と企業、企業と企業が領域の垣根を越えて交流することのできる場をつくることで、コラボレーティブかつインバーティブな空間をつくることを目指した。

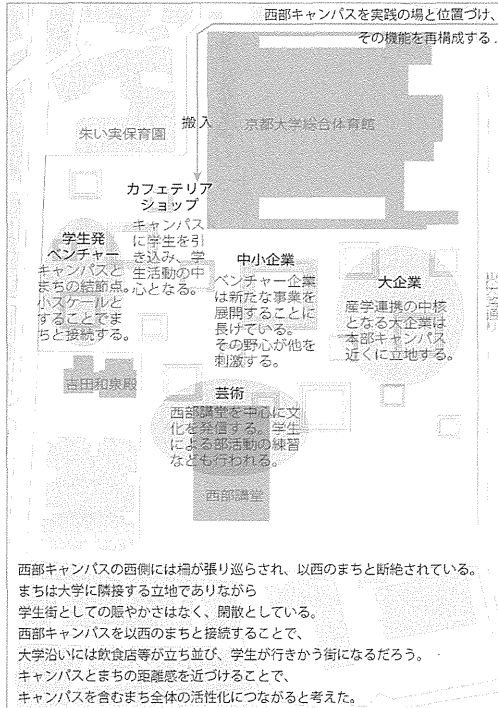


Elevation



1~33. オフィス A. 西部キャンパス事務局 B. 西部講堂事務局 C. 京都大学産学連携本部・ベンチャー支援開発部門 D. 同：イノベーション・マネジメント・サイエンス研究部門 E. 京大ベンチャーファンド F. 関西TLO G. 事業相談スペース H. エントランスホール I. キッチン(給湯スペース) J. ホール K. 会議スペース L. カフェテリア M. ショップ N. 中庭 O. ラウンジ P. コピースペース Q. 機械室 R. トイレ

ゾーニング



周辺施設等の利用

